

氏が選ばれた。

5. 議題などについて

提出された議題の数は大きくわけて28であったが、その主なものは次のようである。降水、蒸発、気温および湿度、気圧計の比較、飛行場における測器および観測法、気象レーダー、放射、高層観測（ラジオゾンデ、商船を利用した風の観測、ドロップゾンデ、気象ロケットなどが含まれる）、波長割りあて、空中電気、下層対流圏探測、観測精度、準器、測器の開発、測器の比較、大気放射能、南極観測、気象測器観測法の手引、技術規定、CIMOの分掌内容、測器観測の研修など非常に広範囲にわたった。

特に今回の委員会の中心課題というべきものは、観測の範囲を水平方向にも鉛直方向にも一層拡大することであったと思われる。つまり、これまで洋上の観測が非常に欠けているのに対して何とか方策を立てなければならぬ。商船や商業飛行機を利用すること、ロケット、人工衛星を気象観測にもっと利用することが真剣に考えられた。なお、これらに対して具体的な活動をするためにエグゼクティブ・ワーキンググループが作られた。これは委員長、副委員長、吉武日本主席代表、英仏代表などで構成されている。今後の活躍が期待される。

6. 技術講演会、測器展示会

正式会議が終わった後、引き続き技術講演会が開かれた。その主題は、ラジオゾンデによる高層観測、気象ロケットおよび気象衛星の種々の装置および気象レーダーに分けられる。3日間にわたって熱心な討論が行なわれたが、今後の気象測器の進むべき方向を示しているように思われた（口絵写真4参照）。

会議の期間中、約10日間にわたって気象測器の展示会が気象庁講堂で行なわれた。約30社、約200点の種々の測器がわが国の進歩した現状を各国代表に示した。普通露場で使用しているものから、気象ロケットや超音波風速計などの新しいものにまで及んだ（口絵写真5参照）。

7. おわりに

半月以上にわたる国際会議を無事終了することができて本当に喜ばしい。天候にもめぐまれ、日光へのエキスカッション、都内観光など外国の代表は日本の秋を十分に満喫されたと思う（口絵写真6参照）。柴田長官夫妻のレセプション、吉武日本側事務局長夫妻のサヨナラパーティーなど、そのもてなしにも感謝の言葉を惜まなかった。

これを機会に、わが国の気象測器観測法の方面に今後とも世界的視野で一層貢献することを期待したい。

C I M O こ ほ れ 話

CIMO (390p 記事参照) の各国代表は気象台関係者が大部分であったが、変り種は Finland 代表であった。首席代表 Vaisala 氏はヘルシンキ大学の教授であるが、世界27カ国で使われているバイサラゾンデの製作会社、バイサラカンパニの社長でもある。氏は長年フィンランドの高層気象観測の発展に尽し、また軽量安価で簡便（精度もよいという）なラジオゾンデの普及に努力し、

母国の外貨獲得にも大いに貢献しているようである（年産50000台）。氏ともう一人の代表 Toivola 氏（バイサラカンパニ）は気象庁に長官を訪ね、CIMO 期間中に受けた歓待に謝意を表し、フィンランドの高層気象学会のバイサラ記念メダルを贈呈した。このメダルはフィンランド国外では4人しか所持していないとのことであった。（関口理郎）